

介護実習における学生の成長・変化 — 介護実習Ⅰ～Ⅱまでの実習に関するアンケート結果の比較 —

寺嶋 洋恵 小林 朋美 大澤 史伸
杉山せつ子 山本るり子 矢部 弘子

聖隷クリストファー大学

On the Growth and Changes of Students Who Take Practicum I ~ III — An Analysis of the Findings of the Questionnaire —

Hiroe TERASHIMA, Tomomi KOBAYASHI, Sinobu OSAWA
Setuko SUGIYAMA, Ruriko YAMAMOTO, Hiroko YABE
Seirei Christopher College

抄録

2002年度入学の介護福祉専攻学生31名を対象とした、介護実習Ⅰ～Ⅲまでの実習終了後アンケートをまとめた。その結果、利用者とのコミュニケーションと職員とのコミュニケーションでは可能となる時期に違いが見られ、職員と話しができるまでには長い期間要していた。また、利用者と話せなかった学生は、職員とも話すことができていなかった。

自分らしさを表現するには最低でも2週間要し、特に実習1週目は学生の精神的負担が大きいため、精神的サポートの必要性が示唆された。

全体的に、介護実習Ⅰでは自分中心のような傾向がみられたが、実習を重ねるごとに利用者や現場に視点が向き、多角的に個別介護とは何か、介護福祉とは何かを考えようとする姿勢に変化していた。

キーワード：介護実習、アンケート、学生の成長と変化

はじめに

介護実習は、学生が学内で学んだ知識技術を
確認する場であると同時に、実際に利用者
と向き合い、個別介護の必要性や対人関係
等について深く考える場である。また、実
習体験から自分に何が足りないのか等振り
返ることで、体験したことを意味づけ、自
分のものとする事ができる。

本学では、2002年度に入学生を迎えて
から3年が経過し、介護実習Ⅰ～Ⅲまで一
通り終了した。本学での介護実習教育も、
利用者や職員との関わりを通して、学生
が自分なりの介護観を確立し、専門職と
しての成長および人間的成長を目指して
いる。

そこで、2002年度入学生がこれまで行
った実習の中で、どのように変化し成長が
みられたのか、各実習終了後に実施した
アンケート結果を分析しまとめた。

I 研究目的

介護福祉士養成における指定規則改正
後、介護実習教育に関する教育方法や指
針となる研究報告は少ない。教育方法が
確立されていない中で、学生がどのよ
うな学びや成長をするのか実情を把握
しておく必要がある。アンケート結果を
まとめることは、学生の反応を見ながら
の教育を構築していくことにつながり、
教育としての実習を確立していくことが
できると考える。今回の結果は、今後
の介護福祉関連教育の参考としたい。

II 研究方法

1) 対象

2002年度入学の介護福祉専攻学生31
名であり、女性26名、男性5名である。

2) 方法

介護実習Ⅰ～Ⅲまでの実習終了後アン
ケートを用いた。

質問内容は、介護実習Ⅰに関しては、「
スーパービジョンが学習に役立ったか」
「利用者・職員と話せるようになった時
期はいつか」「自分らしさが出せるよ
うになった時期はいつか」などである。
介護実習Ⅱは、介護実習Ⅰの内容をベー
スとし、介護過程に関する質問を加え
た。介護過程に関する質問内容は、「介
護過程展開紙の記入した順番」など
である。介護実習Ⅲのアンケートは、
介護実習Ⅱの内容に訪問介護実習につ
いての質問を加えている。また、自由
記述として「実習前に自己勉強してお
けば良かったこと」「実習に関する自
由意見」などを記述してもらうように
した。

アンケートは、実習終了後10日以内
に実施している。アンケートの回収率
は、介護実習Ⅰが31名中28人(90.3%)
、介護実習Ⅱ・Ⅲともに31名中29人
(93.5%)である。

3) 倫理的考慮

アンケートを使用することについて、
学生には個人が特定できないような形
で発表することを伝え了承を得た。

II 介護実習全体の概要

1) 実習施設・実習期間の概要

2002年度入学生が介護実習を行った
施設は、

介護老人福祉施設 7 施設、介護老人保健施設 2 施設、重症心身障害児者施設・身体障害者療護施設・救護施設の各 1 施設、計 12 施設であった。

実習期間は、介護実習Ⅰは 1 年次の 2002 年 9 月 17 日～27 日の 2 週間、介護実習Ⅱは 2 年次に行い 2003 年 11 月 17 日～12 月 12 日までの 4 週間、介護実習Ⅲは 3 年次で 2004 年 6 月 7 日～7 月 2 日の 4 週間である。介護実習Ⅲについては、4 週間のうち 1 週間は訪問介護実習である。

実習内容は、各段階において、職員と一緒に日常生活援助を行う。介護実習Ⅱ・Ⅲについては、受け持ち利用者の介護過程を展開しながら、他の介護業務を職員と一緒に実施する内容となっている。具体的な実習内容については後述する。

Ⅲ 介護実習の具体的内容

介護実習Ⅰでは、利用者とのコミュニケーション能力を高めることを主な目的・目標としている。そして、利用者との関わりの中で他者理解を深め、同時に専門職としての自己理解、自己覚知を高めていくことを目指す。また、実習では、個々の状況に応じて個別的な対応が求められる、学内で学んだ基礎知識や介護技術を実践し、個別介護とは何かを学んでいくこととなる。

介護実習Ⅱは、一人の受け持ち利用者を決定し、個別介護計画の立案・実践ができることを目的・目標としている。介護実習Ⅰで学んだコミュニケーションを基礎に、個別介護計画立案に必要な情報を引き出すコミュニケーション技術や、他職種との連携について学んでいく。そして、利用者理解を深めながら介護計画を立案し、実践という体験につなげていく実習である。

介護実習Ⅲは、在宅福祉実習を 1 週間体験するが、主な目的・目標は、受け持ち利用者の個

別介護計画の立案・実践・評価である。実習内容は介護実習Ⅱと変わりはないが、より広い視野で利用者の介護ニーズを把握し、介護過程の展開を行う内容となっている。

Ⅳ 実習関連科目の概要

1) 介護実習指導Ⅰ～Ⅲ

介護実習指導Ⅰは、介護実習Ⅰの前後に行われる授業であり第 1 セメスターに開講している。本学独自に開講されている実習入門と併せ事前指導を行った。介護実習指導Ⅰは、実習の準備をするための事前学習と、実習体験を振り返り、自己の傾向や今後の課題等を見出すための事後指導とを行った。

介護実習指導Ⅱは、介護実習Ⅱの前後の科目であり、第 4 セメスターに開講している。実習前の学習としては、介護実習Ⅱの目的・内容の理解、実習における学習計画、実習課題の明確化を各自で行った。また、専門的知識を高めるために、疾患や障害の特徴など身体中心のドリルを用いて学習を進めた。実習後は、グループスーパービジョン・個人スーパービジョンにより実習体験を意味付けし、自己の課題を明確化する授業内容であった。

介護実習指導Ⅲは、介護実習Ⅲの実習前後の科目であり、第 5 セメスターに開講している。実習前の学習は、介護実習Ⅲ及び訪問介護実習の目的・内容の理解と、社会福祉制度等を中心にしたドリルを作成し、それを基に、学生個人が専門的知識を深めていった。

2) その他実習関連科目について

その他の実習関連科目には、介護概論Ⅰ・Ⅱ、介護技術Ⅰ～Ⅴ、形態別介護技術Ⅰ～Ⅴの専門科目があり、それぞれ介護実習前後に専門知識

技術が修得できるよう開講している。授業内容は、厚生労働省の定める指定規則に基づいて行な。科目開講時期については、表1に記した。

表1 実習関連科目の授業時期

1年次		2年次		3年次春
第1セメスター	第2セメスター	第3セメスター	第4セメスター	第5セメスター
介護実習指導Ⅰ			介護実習指導Ⅱ	介護実習指導Ⅲ
介護概論Ⅰ		介護技術Ⅴ		介護概論Ⅱ
介護技術Ⅰ～Ⅱ	介護技術Ⅲ・Ⅳ	形態別Ⅰ・Ⅳ	形態別Ⅲ	形態別Ⅱ・Ⅴ

Ⅳ 結果

1) 利用者・職員と話ができた時期

介護実習Ⅰ～Ⅲにおけるコミュニケーションに関する結果が表2である。

『利用者』と話せるようになったのは、介護実習Ⅰ～Ⅲとも、実習開始から1週間で9割の学生が話せるようになっており、どの実習においても、初日から話せるようになったと回答した学生が多かった。最後まで話せなかったと回答した学生はほとんどいなかった。

『職員』と話せるようになった時期は、介護実習Ⅰでは、1週間経過した時点で約7割近くの学生が話せるようになっていたが、「初日から話せるようになった」と回答した学生は8人(28.6%)にとどまった。そして、「最後まで話せなかった」と回答した学生が3人(10.7%)であった。介護実習Ⅱになると、「初日から」が2人(6.9%)と減少し、1週目中頃以降より徐々にコミュニケーションが可能になっている。介護実習Ⅲでは、「初日から」が9人(31.0%)で、「最後まで話せなかった」と回答した学生が3人(10.3%)見られたが、約6割の学生が1週目の終わりまでには話せるようになっていた。

利用者と最後まで話せなかった学生は、職員とも最後まで話せていなかった。

表2 利用者・職員と話ができた時期

	介護実習Ⅰ		介護実習Ⅱ		介護実習Ⅲ	
	利用者	職員	利用者	職員	利用者	職員
初日から	13(46.4)	8(28.6)	10(34.5)	2(6.9)	17(58.6)	9(31.0)
1週中頃	11(39.3)	6(21.4)	14(48.3)	10(34.5)	5(17.2)	7(24.1)
1週終わり	2(7.1)	4(14.3)	3(10.3)	3(10.3)	3(10.3)	3(10.3)
2週初め	1(3.6)	0(0.0)	1(3.4)	6(20.7)	2(6.9)	2(6.9)
2週中頃	0(0.0)	4(14.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
2週終わり	0(0.0)	3(10.7)	0(0.0)	2(6.9)	0(0.0)	3(10.3)
3週初め	/	/	1(3.4)	1(3.4)	0(0.0)	2(6.9)
3週終わり			0(0.0)	2(6.9)	0(0.0)	0(0.0)
4週初め			0(0.0)	2(6.9)	0(0.0)	0(0.0)
最後まで話せなかった			1(3.6)	3(10.7)	0(0.0)	1(3.4)

2) 施設の日課に戸惑いがなくなった時期

学生が、施設の日課に慣れていく様子をまとめたのが表3である。介護実習Ⅰでは、「初日から」が2人(7.1%)、「1週目中頃」が11人(39.3%)、「1週目終わり」が10人(35.7%)と回答しており、合わせると1週目終了時点で約8割の学生が戸惑いがなくなったとした。介護実習Ⅱは、「1週目中頃」が9人(31.0%)、「1週目終わり」が5人(17.2%)で、半数の学生は1週目には戸惑いがなくなったと回答した。しかし、最後まで戸惑っていた学生が2人(6.9%)いた。介護実習Ⅲでは、1週目終わりまでに戸惑いがなくなったと回答した学生が少なく、「2週目初め」と「2週目後半」と回答する学生が多かった。

表3 施設の日課に戸惑いがなくなった時期

時期	人(%)		
	介護実習Ⅰ	介護実習Ⅱ	介護実習Ⅲ
初日から	2(7.1)	0(0.0)	0(0.0)
1週中頃	11(39.3)	9(31.0)	3(10.3)
1週終わり	10(35.7)	5(17.2)	4(13.8)
2週初め	4(14.3)	4(13.8)	8(27.6)
2週中頃	1(3.6)	0(0.0)	0(0.0)
2週終わり	0(0.0)	3(10.3)	7(24.1)
3週初め	/	4(13.8)	3(10.3)
3週終わり		0(0.0)	1(3.4)
4週初め		0(0.0)	0(0.0)
4週終わり		1(3.4)	0(0.0)
最後まで戸惑った	0(0.0)	2(6.9)	3(10.3)

3) 自分らしさが出せるようになった時期

介護実習Ⅰでは、1週目終わりまでに自分を出せるようになった学生は13人(約46%)、2週目から自分らしさを出せるようになった学生が14人(約49%)となっており、ほぼ半数ずつの回答となった。介護実習Ⅱでは、1週目終わりまでに自分を出せるようになった学生が9人(約31%)、2週目後半、3週目初めと回答した学生が各7人(24.1%)であった。しかし、「最後まで出せなかった」と回答した学生が3人(10.3%)いた。介護実習Ⅲは、1週目終わりまでに自分を出せるようになったと回答した学生が5人(約17%)と少なく、2週目以降に出せたとする回答が多かった。最後まで出せなかった学生は2人(6.9%)であった。

また、どの実習とも「初日から」と回答した学生はほとんどいなかった。

表4 自分らしさが出せるようになった時期

時期	介護実習Ⅰ	介護実習Ⅱ	介護実習Ⅲ
初日から	0(0.0)	0(0.0)	1(3.4)
1週中頃	4(14.3)	3(10.3)	2(6.9)
1週終わり	9(32.1)	6(20.7)	2(6.9)
2週初め	6(21.4)	0(0.0)	6(20.7)
2週中頃	4(14.3)	0(0.0)	0(0.0)
2週終わり	4(14.3)	7(24.1)	4(13.8)
3週初め	/	7(24.1)	4(13.8)
3週終わり		1(3.4)	3(10.3)
4週初め		1(3.4)	4(13.8)
4週終わり		0(0.0)	1(3.4)
最後まで出せなかった	1(3.6)	3(10.3)	2(6.9)

4) スーパービジョンの有効性

介護実習中のスーパービジョンに関する結果が表5である。介護実習Ⅰでは、「とても有効だった」が6人(21.4%)、「有効だった」が15人(53.6%)であり、両方を合わせると7割以上の学生が意味のあるものとして位置付けている。介護実習Ⅲになると、「とても有効」が15人(51.7%)、「有効だった」が11人(37.9%)と、

約9割近くの学生が自分の学習に役立つものとして認識していた。特に介護実習Ⅲでは、「とても有効だった」と感じる学生が半数以上であり、介護実習Ⅰと比較すると違いが明らかになった。

「無意味だった」と記述した学生はほとんどいなかった。

表5 スーパービジョンの有効性

時期	介護実習Ⅰ	介護実習Ⅱ	介護実習Ⅲ
とても有効	6(21.4)	11(37.9)	15(51.7)
有効	15(53.6)	14(48.3)	11(37.9)
多少有効	7(25)	3(10.3)	1(3.4)
有効ではない	0(0.0)	0(0.0)	1(3.4)
無意味	0(0.0)	1(3.4)	1(3.4)

5) 実習前の自己学習について

実習に行く前に自己学習しておけば良かったことを聞くと、表6に示したように自己勉強の内容が変化していることが分かった。介護実習Ⅰの段階では、「記録の書き方」「介護技術」「障害・痴呆について」などの内容が多かった。介護実習Ⅱになると、「薬」「医学知識」「介護技術」「障害別の知識」「介護過程全般」などで、受け持ち利用者に関連しているものに対して関心が向いているのが分かる。介護実習Ⅲでは、「社会福祉に関する制度」「生活保護法」「介護技術」などであり、社会福祉の制度・法律に目が向いており、実習の目的・目標に関わる内容であった。

各実習「介護技術」に関する記述をした学生が多かった。

表6 実習前に自己勉強しておけば良かったこと(自由記述抜粋)

介護実習Ⅰ	介護実習Ⅱ	介護実習Ⅲ
記録の書き方	医学知識・薬に関すること	生活保護法
介護技術全般	痴呆高齢者の接し方	社会福祉に関する制度
コミュニケーションの取り方	リウマチ・筋ジストロフィなどの障害	介護技術全般
高齢者の関心があること	介護技術全般	
	介護過程全般	

6) 介護過程の展開の特徴

介護実習Ⅱ・Ⅲにおける、介護過程の展開用紙の記入した順番をまとめたのが表7・表8である。

本学では、介護技術Ⅳ・形態別介護技術の授業でペーパー事例を用いた介護過程の展開を行っている。表9で介護技術Ⅳの授業展開を示したが、介護実習Ⅱ・Ⅲともに、全学生が情報収集→生活への影響→介護の必要性と問題→問題査定→全体像→介護計画立案という順番で記入しており、授業の進み方と記入する順番とが一致していた。学習の進め方が、授業の通りであるということが分かる。

表7 介護過程の展開用紙 記入した順番 (介護実習Ⅱ)

記入用紙 順番	情報	生活 影響	必要性	全体像	問題査定	介護計画
1番目	29(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
2	0(0.0)	22(75.9)	1(3.4)	3(10.3)	1(3.4)	0(0.0)
3	0(0.0)	4(13.8)	15(51.7)	6(20.7)	1(3.4)	1(3.4)
4	0(0.0)	0(0.0)	10(34.5)	14(48.3)	2(6.9)	1(3.4)
5	0(0.0)	1(3.4)	1(3.4)	3(10.3)	22(75.9)	0(0.0)
6	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.4)	1(3.4)	25(86.2)

表8 介護過程の展開用紙 記入した順番 (介護実習Ⅲ)

記入用紙 順番	情報	生活 影響	必要性	全体像	問題 査定	介護 計画	評価 修正
1番目	29(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
2	0(0.0)	26(89.7)	1(3.4)	1(3.4)	0(0.0)	1(3.4)	0(0.0)
3	0(0.0)	0(0.0)	23(79.3)	6(20.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
4	0(0.0)	2(6.9)	2(6.9)	20(69.0)	3(10.3)	2(6.9)	0(0.0)
5	0(0.0)	0(0.0)	2(6.9)	2(6.9)	20(69.0)	6(20.7)	0(0.0)
6	0(0.0)	1(3.4)	0(0.0)	0(0.0)	5(17.2)	20(69.0)	3(10.3)
7	0(0.0)	0(0.0)	1(3.4)	0(0.0)	1(3.4)	0(0.0)	26(89.7)

表9 介護技術Ⅳ 授業展開

回数	授業内容
1・2	事例提示・説明、記録用紙説明
3・4	事例より情報を書き出す
5・6	各情報について生活への影響を考える
7・8	介護の必要性と問題・問題査定を記述する
9・10	全体像をまとめる
11～14	介護計画の立案

7) 自由意見

介護実習Ⅰでは、「職員・利用者に対してどこまで入って良いのか分からない」「職員との関係」「介護の難しさ・大変さ、介護の意味の深さが分かった」などの記述が見られ、コミュニケーションの取り方や職員との関係、介護福祉についての記述が多かった。介護実習Ⅱになると、実習環境についての記述や介護過程全般、職員との関係についての記述が多かった。介護実習Ⅲでは、介護実習Ⅱ同様に介護過程に関する内容や現場と学内での学びの違いなど、様々なことを多角的に考えることができていた。

表10 自由意見(抜粋)

介護実習Ⅰ	介護実習Ⅱ	介護実習Ⅲ
コミュニケーションの取り方	実習環境について	学内での学びと現場の違い
職員との関係	介護過程全般	介護過程全般
介護の難しさ・意味の深さが分かった	職員との関係	

V 考察

1) 利用者・職員とのコミュニケーション

利用者と話せるようになった時期は、それぞれの実習において、実習開始1週間で約9割の学生が話せるようになったと回答している。そして、全ての実習において利用者とのコミュニケーションは「初日から」可能であったと回答する学生が多数であった。しかし、職員との関係をみると、「初日から」と回答する学生は少

なく、利用者と職員とのコミュニケーションの違いに顕著な差が現れた。

利用者とのコミュニケーションについては、介護実習を行うにあたり、利用者は介護福祉の対象とする人間であり、介護を必要とする対象であるため、比較的関わりを作りやすいと思われる。また、実習生ということもあり、利用者から拒絶されることが少なく、早い時期からのコミュニケーションが可能になったと考えられる。しかし、職員との関係については、あわただしい介護業務の中でコミュニケーションを取らなければならない。また、施設の中では単なる学生としてではなく、専門職を目指す者として見られる。そうした関係性の中で、話しかけることができない、遠慮してしまうという状況が起り、職員とコミュニケーションが取れるまでの期間が長くなったと推察する。

介護福祉の専門職を目指す者として、職員・他職種との関係、利用者との関係は、利用者個人に適した援助を展開する上でも必要不可欠となる。職員・利用者問わず、スムーズに関係性を構築することができるよう、学内でのコミュニケーションに関する演習が必要になるとと思われる。^{注1)}また、実習中に職員と学生間の関係構築が困難である場合、教員がどのように職員・学生と関わりを持つかということも今後の課題になると考えられる。積極的な実習を行うためには、職員とのスムーズな関係構築が必須となる。学生が学び多い実習を行うためにも、実習環境をいかに整えるのか検討する必要もあるだろう。

2) 施設の日課に対する戸惑いの軽減

介護実習Ⅰでは約8割の学生が、1週目が経過した時点で戸惑いがなくなると回答した。そして、介護実習Ⅱでも同じようなことがいえ、

5割近い学生が1週間で戸惑いがなくなるとしている。しかし、介護実習Ⅲでは、1週目終了時では約2割にとどまり、多くの学生が2週目で戸惑いがなくなるとした。これは、介護実習Ⅲは訪問介護実習が入るため、日課に慣れるまでのリズムが崩れ、ズレが生じたのではないかと考えられる。また、介護実習Ⅲは実習の最終段階にあたり、様々な施設での日課や体験等もあって、戸惑いを解消するまでに時間がかかったのではないかと考えられる。「最後まで戸惑った」と回答している学生も3人(10.3%)おり、施設の日課について考える実習であったと推察されるが、全体的にみると、比較的早い段階で施設の日課を受け入れ実習を行うことができるといえる。

3) 自分らしさが出せる時期

介護実習Ⅰ～Ⅲともに、「初日から自分を出せた」と回答した学生はほとんどいなかった。このことは、自分の知らない施設へ行き、初対面の人との関係作りを行っていくのであるから普通のことと思われる。それでは、いつ頃から自分らしさを出せるようになるのかというと、自分らしさを出すには最低でも2週間はかかるということが結果から分かる。介護実習Ⅰ～Ⅲともに、1週目に自分らしさが出せたとする回答は少なく、2週目以降にようやく自分らしさが出せるようになった学生が多い。自分らしさを出すということは、学生個人が持っているパーソナリティにも関与してくると思われるが、1週目というのは、実習環境に慣れることで精一杯であり、自分らしさを発揮するまでには至らないと推察される。実習に心身ともに慣れ始めた2週目から自分を取り戻し、自分ができること、自分が持っている明るさ等が出せるようになるのではないかと考える。

どの実習においてもいえるが、実習の1週目というのは、職員・利用者とのコミュニケーション問題や、施設の日課に慣れないなど、学生の不安や戸惑いは非常に大きいと思われる。したがって、特に1週目は学生の精神的サポートが必要になると考える。教育的配慮がされたか否かで、2週目以降の実習に影響を与える可能性もあるだろう。

4) スーパービジョンの有効性

本学でのスーパービジョンは、学生が司会・書記を決め、学生が中心となって進めていく方法をとっている。

スーパービジョンについては、介護実習Ⅰでは「とても有効」「有効」を合わせると、約7割以上の学生が自分自身の学習に役立ったと認識している。介護実習Ⅲになると、「とても有効」「有効」と回答した学生が9割に上り、「とても有効」が15人(51.7%)と、介護実習Ⅰと比較して違いが明らかになった。この違いは、介護実習Ⅰは初めての实習ということもあり、スーパービジョンに関する知識が曖昧で、スーパービジョンの意味・活用方法が学生たちの中で不明確であったのではないかと推察される。しかし、段階を重ね意味や活用方法が分かるようになり、それが結果として現れたと考えられる。また、介護実習Ⅲは、個別介護計画の立案もあったため、自分たちの実習にとって今まで以上に有効性を感じたのではないかと考えられる。

5) 実習前の自己学習について

実習に行く前に勉強しておけば良かったと感じたものは、介護実習Ⅰでは、「記録の書き方」「コミュニケーションのとり方」「介護技術」などであり、実習全体に関わるものに対して漠然

と「学習しておけば良かった」と感じているといえる。しかし、介護実習Ⅱでは、「医学知識や薬」「障害別の知識(筋ジストロフィー・リウマチ等)」「痴呆高齢者の接し方」など、受け持ちになった利用者に関連した内容に関心が向けられ、利用者を個別に見ようとしている。介護実習Ⅲでは、「生活保護法」「社会福祉に関する制度」という内容での記述があり、訪問介護実習を体験したことによって、制度・法律に関する知識の必要性を考えるようになったと考えられる。

このように、「学習しておけば良かった」と考える内容が段階的に変化しているのが特徴的で、介護実習Ⅰでは、自分自身が実習で困らないようにするために必要な学習内容であるといえ、自分中心の傾向があるといえる。介護実習Ⅱ・Ⅲになると、利用者に関連していることに対して関心が向き、利用者を全体的に捉えようとする姿勢へと変化したと思われる。

また、介護技術に関することがどの実習においても記述されていた。施設における介護技術は、全てにおいて利用者の状況に応じた応用技術であり、決まった方法はない。利用者の状態に適した技術を提供するためにも、基本となる技術の修得が重要であると気付くことができたからであろう。今後の教育の中でも、介護技術を復習する場が必要になることを示唆している。

6) 介護過程の展開の特徴

全学生が、介護技術Ⅳの授業展開と同じように介護過程を展開していることが結果で明らかになった。

現場では用意された事例はなく、初めて学生自身の力で情報収集を行い介護計画の立案をすることになる。何もない状態から始めるのであ

るから、学生の戸惑いは大きい。その際の手がかりとなるのは授業である。授業でどのように展開していったのかが鍵となり、授業と同じように展開することで、どういった情報が必要になるのか、どのように進めていけば良いのかなど、学生自身で見出すことができるのであろう。しかし、学生の思考が発達したかを考えると、必ずしも発達したとはいえないであろう。素直に授業を受け入れ、授業を真似ることで学習している段階であると思われる。

介護過程は、思考能力が問われるものである。学生自身が主体的に考えていけるような機会を多く持ち、繰り返し学習していくことが必要になる。今後も、介護技術と形態別介護技術の二本立てで学生の思考過程を深め、自分自身の能力とすることができるよう、授業の工夫が必要になるであろう。^{注2)}

7) 自由意見の特徴

介護実習Ⅰ～Ⅲに共通していることは、「職員との関係」についての記述が多かったことである。どちらかという利用者との関係より、職員との関係性を重要視する傾向があるといえる。学生は職員から評価をされる立場であり、指導を受ける立場であるため、関係がどうかかが重要になるからであろう。こうした学生の思いが、職員とのコミュニケーションが円滑に取れない要因になったとも考えられる。しかし、「職員とどうであったか」という結果論で終わってはならない。「なぜ職員との関係が必要なのか」という理解を深めることが必要である。職員とのコミュニケーションの重要性を理解できるような指導が必要になると考える。

全体的に、職員との関係に悩みながらも介護実習Ⅱ・Ⅲは介護過程の展開が主であるため、受け持ちの利用者に視点を向けることができた

ようであった。また、介護実習Ⅲでは、「学内での学びと現場の違い」と記述されており、学内での学びは介護福祉の知識技術の基礎理論になること、現場は応用であることが学生なりに理解ができてきていると思われる。

自分だけを見ていた学生が、次第に利用者に目が向くようになり、現場での事実を見据え介護福祉とは何かを様々な視点から考えることができるようになったのであろう。

VI まとめと今後の課題

- 1) 2002年度入学の介護福祉専攻学生31名の、介護実習Ⅰ～Ⅲまでの実習終了後アンケートを用い学生の変化をまとめた。
- 2) 利用者とのコミュニケーションは、比較的早い時期に可能となるが、職員とのコミュニケーションは、取れるようになるまでの期間が長くなる。また、利用者と話せなかった学生は、職員とも話すことができていなかった。今後、学内でもコミュニケーションに関する演習の必要性と、実習中の配慮が必要であることが示唆された。
- 3) 施設の日課に対しては、最後まで戸惑っていた学生も数名いたが、ほとんどの学生が1週間で受け入れることができていた。
- 4) 初日から自分らしさを出すことは困難であった。早い時期から自分らしさを出すことは学生のパーソナリティーに関与するが、多くの学生が自分らしさを出すのに2週間かかった。特に実習1週目は、学生の精神的負担が大きいため、教育的配慮（精神的サポート）が必要になる。
- 5) 実習に行く前に自己学習しておけば良かったことは、初段階の介護実習Ⅰでは自分中心の内容であった。実習を重ねるごとに利

用者に関心が向き、利用者を全体的に捉えようとする姿勢に変化した。介護技術に関しては、繰り返し復習する機会が必要である。

- 6) 介護過程の展開は、学生の思考過程が発達しているとはいえない。授業展開を真似ることで学習している段階である。学生の思考を深めるためにも、学内での繰り返しの学習が必要である。
- 7) コミュニケーションの取り方や職員との関係に悩んでいた学生が、次第に利用者を見ることができるようになり、学内での学びと現場での学びとの違いに気付くことが可能であった。段階を重ねるごとに、介護福祉について深く考えようとしていた。

注

- 1) 2003年度入学生より、介護実習指導Ⅰの授業内にてコミュニケーションに関する演習を30時間実施している。
- 2) アンケートより、「痴呆高齢者の介護過程の展開が難しい」という意見が多くみられたため、2003年度入学生より、形態別介護技術の授業内で、痴呆高齢者の事例を用いた介護過程の展開を加え実施している。